［セッション I］

「本物の魔力―日本の寺社観光における歴史的言説の諸問題―」

中西裕二（立教大学教授）

日本人にとっても、また訪日外国人観光客にとっても、日本の寺社は観光の重要な目的地である。しかし日本の寺社をめぐる宗教体系は、明治維新直後の神仏分離政策により根本的な変化を余儀なくされた。日本の神社、とくにある程度の規模をもつ神社は、そのほとんどが中世から始まる神仏習合思想の下で発展し、その性格は神を祀る寺院といったものであった。だが明治初期の神仏分離政策と廃仏毀釈運動は、この中世以降の宗教体系を改変し、神社と寺を明確に区分することを目的とした。現在、多くの観光客を惹き付ける―それも仏教的要素を廃している―神社の形態は、実は歴史的に近代以前まで存在せず、近代になり初めて登場したものなのである。これが観光地において、日本の歴史的、伝統的文化の表象として位置づけられ、観光の対象となっている。従って、寺社に関する日本の文化観光とは、近代的なイデオロギーを再生産する装置であるとも言えるのである。